
異世界に飛ばされました。

探偵川上Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に飛ばされました。

【著者名】

Z5352Z

探偵川上〇

【あらすじ】

魔王を倒すため異世界に送り込まれた一階堂悠木。はたして彼は魔王を倒せるのか？

プロローグ。（前書き）

カメ更新になると思われますが、よろしくお願いします。

プロローグ。

……結論から言おう。

俺は異世界に飛ばされたらしい。

何故か？……それは目の前にいる、こいつ等に聞いてくれ。

「うーんとね、一応こいつが僕の世界の中で、君の世界に会こやつ
な奴だよ」

「へー、こんな奴が？」

人の事をこいつとか、こんな奴とか呼ばわりする自称神に。

「「自称じゃないよ」」

「いいかい、僕は君が住んでいた世界の神」

「んで、僕が別世界の神なの」

「それでだね、何故君がここに呼ばれたかというとだね

「それは、僕の世界が大変なことになつてるんだ

おい、代わる代わる喋るな。

どっちが喋つてるのか分からなくなるじゃないか。

「僕の世界はね、君の世界で言つと剣と魔法のファンタジーつてやつだよ」

「で、僕は別世界の神から助けを求められて、君を呼んだんだ」

「今、僕の世界では魔王つて奴が無茶苦茶してるんだ」

「それをどうにかするために、君を送り込むんだ」

「なんで俺が？」

「アンタ等が神様なら、どうにかできるだろ。」

「それがね、僕ら神はね」

「天地創造の時にしか、手出しきれないんだ」

「……ちよつと待て。俺をその別世界に送り込むのだって、手出しそることになるんじやないか？」

「それは違うよ」

「僕らが手出しきれないのは、生き物の生死に関する事だけなんだよ」

「つまり、君を送り込んだところで、魔王の死が決定するわけじゃないんだ」

「ところで、君にまつわるチートを付けてあげるから、向こうの世界で頑張ってね」

は～ひょつと待て。まだ俺は異世界に行へとは言つてないぞ！

「無駄無駄、君に拒否権は無さよ」

「で、君にあげるチートは、この武器とある能力だよ」

そう言つて、俺の前に置かれたのは白銀の太刀だつた。
「これはね、ランス、太刀、双剣の三種類に変形させることが出来
て、切れ味も落ちない」

「で、能力の方は『エアロック』っていう能力だよ」

「『エアロック』はね、一時的に空気を固めることが出来るんだ
つまり、これを使えば、一段ジャンプしたりとか、空中で色々な動
きができるんだ」

「ただし、連続使用は一十回までだから気を付けてね」

「「ヒーフウェイで、ヒーフウェイ」「こしゃー」「こしゃー」

「おい、待てや～～。
何がいつてらっしゃい、だ。

つて、なんで俺は浮遊感に包まれてんだ？」

「うわああああああああああああああ～！～～～～～～～～」

俺は超上空から落していったのだった。

一話 異世界人との初コンタクト。

side フェイ

「この堅物オヤジ！！」

「そりゃこいつのセリフだ、この我が儘娘！！」

私は今、ギルドでヴァルスさんと言い合いでいた。

「いいじゃない！別に一人で任務受けても！！」

「ダメだつつてんだろ！ギルドでは一人一組ツーマンセルが基本だつていってんだろ！！」

毎日こんなやり取りをしているのだが、なかなか折れてくれない。

「もういい！勝手に行くから！」

「あ、おい！止めるフェイ！」

私はヴァルスさんの制止も気にせず、ギルドを飛び出した。

「いいもん、認めてくれないなら、実績を出すまでー！」

私は意気揚々と近くの森に向かつて走り出した。

side out

「あんのバカ……！」

フエイのことじだ、どうせ実績上げて認めてもらおうって思つてんだ
る。

「リン、サヤ！」

「なに？」

「どした？」「

俺は一人を呼び、事情を話した。

「つまり、フエイを連れ戻せばいいのね？」

「ああ、悪いな。疲れてる所」

「いいよ、別に。フエイは妹みたいなもんだし」

二人とも快諾してくれた。

ホント、いい奴等だぜ。

「じゃ、行つてくるわ」

「マスターは、ゆつくりしててよ」

そう言いながら、二人は出て行つた。

「俺は落下しながら、どうにか体勢を整えようとしていた。
ぐるぐる回つながら、どんどん地上に近づいていくのが分かる。」

その時、手に何かが当たった。

それは、いつの間にか腰につけられていた、あの白銀の太刀だった。
俺はある漫画のシーンを思い出した。

もし、この武器の変形したランスが、俺が思っている形をしていれば……。

「そんなことできるかどうか、分からぬけど……」

やるしかない。

俺は太刀を手に取り、ランスを思い浮かべた。
すると、太刀が一瞬で姿を変えていた。

「うおっー?」

その瞬間、ランスを下にした状態で、落下し始めた。

おかげで、体勢の方は安定した。

そのランスの形は、柄の部分で俺の身長と同じぐらいの長さがあり、
刀身は柄の一倍以上の長さがあった。

「……これってランスというより、大剣じゃないか?」

そんな疑問をよそに、落下速度は増していく。

俺は大急ぎで鐔に足を乗せた。

そして、そのまま落下速度を上げながら、落ちて行った。

side フェイ

私は森の中をモンスターを倒しながら突き進んでいた。

「なによ、こんな弱い奴等のためにペアを組むなんて」

剣に付いた血を、剣を左右に振つて飛ばした。

「さて、何か実績を示せるものが欲しい所なんだけど……」

そんなことを思つていると、少し開けたところに『カレモンスター』が寝ていた。

「……よーし、コイツを倒して……」

私は足音を殺して、後ろから近づいて行つた。
だが、途中で木の枝を踏んでしまい、モンスターが目を覚ました。

「まづつー！」

そう思つた時には遅かった。

モンスターの尻尾が腹に当り、吹き飛ばされて木にぶつかった。

「かはつー？」

肺の中の痰が全て吐き出され、その場に倒れこんだ。

「うがああああああああ！」

もうダメだ、と思つた。

モンスターは手を振り上げていた。

その時だつた

空から声が降ってきた。

side out

俺はどんどん加速して落ちて行っている。
息がうまくできない。

」↙」

今まで怖くて下が見れなかつたが、勇気を出して下を見てみた。すると、森の中の開けた場所にいる、『テ力い獸の上に落ちようとしていた。

ପାତା ୧୦୦

俺は叫び声をあげながら、獣を大剣で切り裂きながら、地面にクレ

ーターを作り上げた。

何かが悲鳴を上げながら倒れこんだ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

土煙にせき込みながら、大剣を肩に担ぎクレーターから這い出ると、木の近くに倒れこんだ女の子がいた。

「お、おい、大丈夫か？」

「元氣」

……氣絶してんのか?』

「……。」
「どうか、この子の服装って、どう見てもファンタジー丸出しだよな……。」

剣を握っていて、皮の鎧を身に着けているし、盾も近くに転がっている。

そんなことを思つていると、突然後ろから声を掛けられた。

「あなた、何してるの？」

「あ？」

振り返ると、東〇に出てくるナイフを投擲するあのを彷彿とさせる見てくれの女の人と、ゴシック特有の黒を基調とした服装の女の人が立っていた。

「あれは、君が？」

「シックさんが指差した先には、先程倒れこんだ獣がいた。

「あ、ああ、そうだけど?」

「ペアは?」

「ペア?なんだそれ?」

「「は?」」

二人が呆れたような顔をした。

「あのね、基本こういう所を行動する際は、ペアで行動するの。どうみても、君ってギルドの人間だし」

「ギルド……?」

ギルドってあれか?

クエストを受け付けるといふ、みたいな?

「とりあえず、何処のギルドの所属か教えてくれるかしら?」

東〇のナイフ以下略が、話しかけて来た。

「何処の所属って言われても、答えようがないだ。どこにも所属してないし」

そりやそうだ、さつきの世界に来たばかりだし。

「何処にも……?」

「おかしいなあ……とりあえず、ウチのギルドまで来てもらおうか。そつすれば、問い合わせもできるし」

「やうね」

「というわけで、君。フロイを担いで、ついて来て」

「フヒイつて誰だよ」

「そこに横たわってる女の子」

「アンタ等のどっちかがすればいいだろ?」

「君、男なんだから頑張りなよ」

「おいおい……」

その後しばらく粘つてみたものの、結局俺が担ぐ事になった。そのため、肩に担いでいた大剣を太刀に戻し、腰にしまった。

「へえー、珍しい武器持ってるね」

「ンな」とはビリでもいいから、むつかとしてくれ」

なんでもいいから、とりあえずこの世界についての情報が欲しい。あの神たちの口ぶりだと、元の世界に戻りたかつたら魔王を倒せといつことだらう。

あいつ等のせいで変な所に飛ばされたけど、こいつなつてしまつては仕方ない。

楽しんでやうひじやないか。

こうして、俺の異世界での冒険が始まるのだった。

一話 戰闘準備

しばらく一人の後について歩くと、森から抜け街が見えて来た。そして、その街の中の酒場みたいなところに着いた。

「さあて、入つて」

俺は頷きながら女の子を抱え直し、足を踏み入れた。入った途端、周囲から鋭い視線を向けられた。

「な、なんだ……？」

「はいはい、奥に行つて～」

俺は「シック女に背中を押され、奥に進んだ。すると、カウンターにいた坊主のオヤジさんが、顔を上げた。そして、俺を一瞥した後、後ろの一人に声を投げかけた。

「リン、サヤ、コイツ誰だ？」

「さあ、私にも分からぬわ」

「サヤの言う通り、私にも分からぬ。一応連れて來たけどね」「とりあえず、どこにコイツを下せばいいのか教えてくれ」

俺はそろそろ周囲の視線に耐えることが出来なくなつてきていたので、声を上げた。

「おお、フヨイならそこにて座らせておけ」

そうだつたな、「ヨイシツさつきもフュイつて言われてたな。
よし、さつさとフュイを下さないと……。」

俺がフュイを下している間に、後ろの一人が事情説明をしていた。

「で、お前さん、どこの所属だ？」

俺がフュイを近くの椅子に座らせたのを確認したオヤジさんが、さつき「人から聞かれたことと同じことを聞いてきた。

「それがさ、ヴァルスさん。この人どこにも所属していないって言つんだけど」

「はあ？ ンなことねえだろ。あの森にいたんだろ？」

「ええ、そうよ」

「……ちょっと待つてろ」

ヴァルスと呼ばれたオヤジさんは、奥に消えていった。

そして、十分後。

再びカウンターに顔を出してきた時、困ったような顔をしていた。

「近隣ギルドに聞いてみたが、あの森に派遣された奴等はいらない
しい」

「ところが、どこにも所属していないってのは本当なんだ？」

「そういうことになるわね……」

そこで、三人の田が一斉にこちらに向いた。

「な、なんだよ」

「民間人にしては、得物が上等すぎるしな……」

「それに、ここで見かけたこともない顔だし……」

「着ている服も、少し変ね……」

俺は自分の着ている服を見た。

長袖の黒ワイシャツに黒ジーパンという至って普通の恰好だ。これが変だというなら、お前らの服の方がおかしいだろ。

「う、ん……」

突然うめき声が聞こえて来た。
どうやらフエイが目を覚ましたようだつた。

「おう、フエイ。目覚めたか?」

「あれ、私、森に……」

「その森で大型モンスターに殺されそうになつてたところを、コイツに助けられたそつだぞ?」

「え!?」

フエイはヴァルスさんの大まかな説明を聞いて、驚いたようだ。

「一人で倒したの!?ええと……」

「一階堂悠木だ。悠木と呼んでくれ」

「ユウキね。私はフエイ・リースよ。それで、あのモンスター、一人で倒したの?」

「す」に目を輝かせながら、詰め寄つてきた。

「あ、ああ、まぐれだつたけど……」

「まぐれでもす」によ、ねえ、ユウキは誰と組んでるの?」

俺が返答に困つていると、ヴァルスさんが助け船を出してくれた。

「「コイツはどいつもこりフローみたいだぜ。ビリのギルドにも所属していないし、誰とも組んでない」

「ホント…?」

それを聞いたフェイがさうに俺に詰め寄つてきた。

「ねえ、コウキー私と組まない?」

「は?」

「おい、フェイ。何勝手なこと言つてるんだ?「コイツは素性も分からぬ奴なんだぞ?そんな奴をギルドに入れれるか」

「もしかしたら、魔族の手先かもしれないわよ?」

「そりやないでしょ?もしそうだったら、私の使役魔が反応するし」

「……それもそうね」

何やら変な疑いをかけられていたようだ。

「お願い、ヴァルスさん!コウキーの入団を許して!」

「あのなあ……」

ヴァルスさんが渋つていると、「ゴシック女がヴァルスさんに話しかけた。

「別にいいんじゃない?だつて、大型モンスターを一人で倒せるぐらい強いんだし、戦力にはなるでしょ?」

「だがなあ……サヤ、お前はどう思つ?」

東〇のナイフ以下略にヴァルスさんが話しかけた。

どうやら、東〇のナイフ以下略がサヤ、ゴシック女がリンといつ名前のようにだ。

「そうね……入団テストとして、何かをさせたらびつつかしく……」「入団テストねえ……んー、まあ、そうだな……」

ヴァルスさんは腕を組んで何かを考え出した。

「じゃあ、コウキといつたか。サキとリンのどっちかと、サシで戦え。それで勝てたら入団してもいいぞ」

「いや、俺は入……」

「分かったわ……！」

おい、なんでフェイが答えてんだよ。

「じゃ、コウキ、どっちと戦う？」

「……はあ

そんなきらきらした目で見られたら、断れないじゃん。

俺は改めてサキとリンを見た。

どちらも強そうだが……そうだな、リンの方がまだ勝機がありそうだな。

「じゃ……やつち

俺はリンの方を指差した。

「お、私が。いいよ、早速やつちか」

俺はリンに手招きされ、街外れに連れて行かれた。

俺達に付き添つて、フェイ、サキ、ヴァルスさんの三人がついてきた。

「リリから辺でいいかな」

リンは振り返り、10m程間合いを取つた。

「さて、始めようか」

俺は頷き、太刀を構えた。

リンは煙草を口にくわえ、火をつけた。

煙草からは真っ黒な煙が出て来た。

「黒煙……？」

俺は黒煙に對して、本能的に恐怖を感じた。

「期待してるよ、コウキ君。楽しましてね」

リンの言葉が終わると同時に、黒煙が動き出したのだった。

第三話 戰闘一（前書き）

カメ更新すゝる……

第三話 戦闘！

「うわっ！？」

突然、黒煙が鞭のようにしなり、飛んできた。
咄嗟に太刀を手に取り、逆袈裟の軌道で黒煙の大部分を吹き飛ばした。

しかし、霧散した黒煙は再び集まつた。

「こりゃあ……」

てつくり黒煙が勝手に動いていたから、コイツが本体だと思ったが……。

俺は、リンの口に咥えられた煙草に視線を向けた。

「それか」

「お、気が付いた？」

「それがこの黒煙の本体、というより、心臓か？」

「その通り。というか、よくわかつたね」

「もし黒煙が本体、もしくは黒煙内に核があつたら、さつきの一撃で霧散したはずだ」

「へえ、今までに黒煙の初撃に反応できたのは、君で一人目だよ」「ちなみに一人目は？」

「サヤだよ」

「ああ、なんか納得」

俺は太刀を握り直し、集中するため目を閉じた。

集中した。視覚に頼らず、音、風の動き、全てを感じ取れ。

「……いいのかい？ 目、閉じて
「……」

リンの問いに俺は答えず、目を閉じ続けた。

「……ま、いつか。ユウキ君が怪我するだけだし」

リンがそう言つと、風を切り裂く音がした。
あの黒煙が迫つて来ていることは、容易に想像できる。
あれの速さは相当なものだつた。
しかし、この風の流れはさつきと同じだつた。

つまり。

黒煙が俺に当る直前、俺は目を開け、本気で地を蹴つた。
最小限の動きで黒煙を避け、一気にリンに詰め寄つた。

「な！？」
「何驚いてんだ？」

リンの咥えている煙草目がけて太刀を振るつた。

「くつー！」

リンは上体を逸らし、バク転の要領で俺の顎を狙い蹴りを放つてき
た。

それを避け、バックステップで後ろに下がつた。

リンも俺から距離を取つたため、最初と同じ間合になつた。

「驚いた、あんな動きができるんだ」

「まあ、親父や九代目に鍛えられたからな」

そう、俺の家系、二階堂家は先祖代々戦闘の専門家エキスパートなのだ。そこに生まれた俺は、物心ついたころから二階堂家が培つてきた戦闘技術を叩き込まれてきた。

そして、今までの万を超える戦闘技術を全て体に染み込ませ、それらをもとに更なる技術を開発していく。これが二階堂家の規則だった。

「今ので全力じゃないんでしょう？」

「まあな」

「……じゃ、本気出さなきゃいけなくしてあげるよ」

リンはそう言つと煙草を手に取り、黒煙で陣を空中に描いた。

「我求めるは影。我に仇成すものを飲みこめ」

途端、描かれた陣から黒い何かが流れ出て來た。

「まさか、それがさつき言つてた使役魔つてやつか？」

「そうだよ、探知能力がズバ抜けてるけど、別に弱い訳じゃないから。さあ、本気出さないと死んじゃうかもよ？」

「リンーやはり過ぎじゃないのー？」

それまで黙つていたフェイが叫んでいた。

「ユウキが死んじゃうよー！」

「俺は死なねえよ

「え？」

「よつは、俺の本気が見たいんだろ？」

「やつだよ

リンはにこやかにそつまつと、手にした煙草を躍らせた。すると、黒い何かが幾つにも分裂し、その一つ一つが狼のような形になつた。

その数は、ざつと見ても一十を超えていた。

「さあて、久しぶりにちょっと本気だすか……死にたくないしな

正眼に構えていた太刀を、片手に持ち構えを解く。

「あれ、構えを解くの？」

「……来いよ

「…？」

俺は脅しのために、殺氣を放つた。

「行け！」

リンの号令と共に狼共が一斉に動き出した。

そのくせ、コンビネーションはしつかりできてるようだつた。

その証拠に、一体の攻撃を避けた所で次々と、的確に襲いかかってくる。

「ちつ……

これだけ全部の狼が的確に動けるということは、司令塔の役割を担

う奴がいるはずだ。

「……全部同じに見えるな」

身体的特徴では見分けられない。

「逃げてばかりじゃ、どうにもならぬよ?」

リンの言葉を無視し、俺は避けながら観察を続けた。

「……ん?」

その時だった。

俺はあることに気が付いた。

それはこの狼共の中で、一瞬だけ一匹が動いてないよつに見えた。避けながらその一匹に注目してみたところ、その一匹は巧みに隠されていたが確かに動いていなかつた。

「なるほど、そつこいつとか……」

しかし、それに近づくには少々骨が折れる。

その時、思い出したのはあいつ等の言葉だった。

『エアロニック』

そうだ、確かにそれを使えば制限付きとはいえ、ジャンプを繰り返せるとの事だった。

俺は一度、狼の群れから離れた。

「どうしたのコウキ君? ずっと避け続けてるけど?」

「それも終わりさ

「へえ」

俺は太刀を先程の大剣に変えた。

「……何するつもり？そんな隙だらけの攻撃しかできない大剣で？」

「それはお楽しみだよ」

俺は大剣を全力で地面に叩きつけた。

轟音と共に砂埃が視界を遮った。

俺は大剣を太刀に変え、短い助走と共にジャンプした。
そして、最高点に到達した時、足元に足場があるとイメージした。
それを踏み、さらにジャンプする。

そうイメージすると、足裏に何かがあるのが分かつた。

「よつとー」

若干バランスを崩しながらも、再び飛び上がり。
砂埃が晴れたと同時に、俺は落下を始めていた。

「なつー！」

リンが俺の姿を視認したときには、もう遅かった。

「斬つー！」

俺は狼が反応する前に、動いていなかつた狼を兜割りをするようこ

叩き切つた。

すると、周囲の狼は次々に消えて行つた。

そして着地した時に曲げた脚をバネに、一気にリンに近づき、首元に太刀を添えた。

「ほい終わり」

「…………」

リンはしばらく呆けていたが、ゆっくりと両手を上げた。

「私の負けだね。でも、どうして？」

「何が？」

「どうしてあの影が本体つてわかつたの？」

「ああ、それか。あんだけの数の狼がまつたく乱れず攻撃できるのは何故かって考えると、司令塔の役割をする奴がいるはずだつて思つてね。それであいつだけ動いてなかつたから、あいつを斬つた」「…………よく分かるね。あんだけ動いてたのに」

ま、それが出来てなかつたら、生きれてなかつただろうしな。親父はともかく、九代目が容赦なかつたし。

「「コウキ、す」「」」

そんなことを考へていると、後ろからフェイに抱きつかれた。

「「リンのあれに勝てるなんて！」」

「まあ、フェイの言う通り、俺も驚いたな」

続いてヴァルスさんが話しかけてきた。

「「リンもやり過ぎよ？ コウキが強かつたからいいものの」」

「「「」めんよ～、つこつこ」」

リンがサヤに奢められていた。

「ヴァルスさん！」これでユウキの入団、認めてくれるでしょ？
「まあな、即興とはいえ入団テストもクリアしたしな……」
「じゃあ！」
「いいだろ。ユウキ、ようこそ」
「よろしくね、ユウキ君」
「よろしく、ユウキ」
「よろしく……」

こうして。
俺は、ヴァルスさん率いるギルドに所属することになったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5352z/>

異世界に飛ばされました。

2012年1月8日19時35分発行